
彼女と別れる上手な方法。

あーみん@マツサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女と別れる上手な方法。

【Zコード】

Z7998K

【作者名】

あーみん@マツサ

【あらすじ】

「三好京平、でてきなさい。あんたがあたしの夫に相応しいか…見定めてあげる。」

突然目の前に現れた生徒会長

「結婚しようって言ったのは京ちゃんじゃない！この浮氣者！スケベ！人間のくず！」

初対面？の天然系毒舌転校生

「おにいと結婚するのはあたしだよ。
ほかの女人なんてみないでよねッ」

二人に対抗心を燃やすヤンデ的な実の妹　　実の妹…！？

2（理論）×感情論×思想派の思考がぶつかる！

現実と理想が交差する時、物語が始まる。

（この作品は男性向け玄人向けアニメ好き向け心の広い方向け）

わやうじょうかいのじかん。

キャラクターの詳細は少しづつ更新していきます！

見方が最初はわからないと思いますが、訳わからなくなったりしたら、見ること推奨ページ。

基本的には読まなくていいです。

一炉木 夏姫

A型。理論派(+)

生徒会長。

身長高須。巨乳。裸眼。

二ノ瀬 綾芽

O型。感情論派。

転校生。貧乳。眼鏡。

三好 乃愛

A B型。理想派。
妹。貧乳。裸眼。

三好
みよし
京平
きょうへい

A型。理論派（-）
主人公。男。眼鏡。

自分は何の為に生まれてきたのか、などと真剣に考へる事のできる暇人は、

卵が先か鶏が先かを無限ループで考える能力を持つ最近では希少価値の低い、中二病患者であるわ。

… それも末期である可能性が高い。

そもそも答えのないものを探す、考える事が無意味だ。

例えば、難しい数学の問題を解いていたとして。

解き終えた後に回答をなくしてしまったとする。

その瞬間、問題を解いた事実は無意味なものとなるのだ。

努力が水の泡とはよく言ったもので、問題を解く事自体にさほど意味はないのだ。

本来問題を解く事の目的は、どこを間違えてしまったのか知る事にある。

つまり何の為に生まれてきたのか、という問いの答えをどれだけ
考えた所で時間ばかりとる上、
誰もが納得できるような答えはでてこない。

そしてある時気づくのだ。

明確な答えなど一生わかる事はあり得ない、と。

自分はそういう考え方の持ち主なのだ。何に対しても。

理屈っぽくて他者から見ればつまらない男。

良くいっても現実主義者。リアリスト程度のもの。

もちろん幽霊も宇宙人も未来人も超能力者の存在も信じていない。

世間話のついでで言えば、自分もサンタクロースなど昔から信じていなかつた。

どちらかと言えば着ぐるみを被つた人間を下からのぞきこんで、
被り物と被り物の間から僅かに見える人間味溢れるそれをみて、
きやつきや言つて喜んでいるような

…なんとも可愛げのない子供だったと思つ。

自分の性格はあの時から根本的なものはなに一つ変わっていない。

背や体重が成長しよつとも、それは本当に些細な事で。

結局自分が直接見ることのできない外見部分の容姿が変わったところで、自分しか知る事のできない内面部分は何も変わっちゃいなかつた。

こんな自分は……

「三好京平！」

チャイムが鳴るとほぼ同時に突然自分の名前が呼ばれ、京平は否応なしに現実へと引き戻された。

右手にはゆるべシャーペンが握られていて、気づけば授業は終わつている。

ほんやつと俯くような体制のせいで教科書が視界一杯にあつた。

どうやら授業中に目を瞑つた状態で氣を失いながら考え事……平たく言つと睡眠りをしてしまつたようだ。

先程京平を呼んだ女?は、今まで授業を担当していた教諭を押し退け、教壇へと上がつた。

もちろんその際先生側に拒否権などなく、

無理やりとこつた感じは見てすぐにわかる。

「三好京平、でてきなさい。」

「…なつ」

…これは聞き間違えか？まだ夢の中なのだろうか？

と自分に優しい思考を巡らせるも即玉砕。

もう一度自分の名前を口にされ、更に見たことのない女の顔と声に動搖する。

寝ぼけ眼を擦りながら鼻の先までずり落ちた眼鏡をかけ直し、一生懸命頭を働かせる。

が、いまいち京平は自分の状況を把握できていないでいた。

読者もポカーンとしている事間違いない。

…出でこなってこづくづく口調からすると、確実に怒っているのだろう。

やうじやなければあんな威張った言い方、普通しないだろう。

名乗り出まいか、

名乗り出まいか…

これは一旦様子を見た方がいいかもしない。

返事をしないのは失礼かもしねないが、

知らない女に訳もわからず怒られるのも納得いかない。

それに自分の男のカンガやつは危険だと告げている……ような気もする。

クラスメートのお前名前呼ばれてるよ的な視線はとりあえず無視の方向でいこうと思「おーい、きょーくえ。夏姫に呼ばれてんぞー。」

「どうあつ……」

級友の声に訳もない不満をどこかに感じた。

本人に責任はないが、ありがた迷惑に違いない。

当然その声に反応した教卓前の女は、京平の方へ視線を向けると、口を結んだままじぐわぐと机の合間に縫うようにして近づいてきた。

何を言われるのだか、京平は息をのむ。

クラスメートの視線を浴び覚悟を決めて身構えた。

名前を呼ばれた手前後にひけないのはわかっている。

教卓前からこちらへ向かってくる女

：彼女は長くきれいな髪をサラサラとなびかせながら、瞳で真っ直ぐに京平の方を見た。また茶色い

顔は無表情のように見えるが、

怒りでると、されどはそんな氣がする……少し冷めた表情

「あんたが三好京平？」

卷之二

「なんとか言いなさい。」

なんかすんごい威圧感だ。

思わず『す』と『ん』の間に『ん』が入ってしまう程に。

わかりやすく威圧感を数値に直せるとするならば、

常人く波平くジャイアンくくくくく
前の女く小沢さん
越えられない壁くくく田の

つて程に。

さすがに小沢さんには負けるが、
石原都知事相手なら勝るとも劣らない、といった所だらうか。
……つてこの説明はいらないか。

しかし女^{じょ}ときには怯むなど格好悪い、といつ自尊心から動搖を悟
られないよう目は決して逸らさない。

京平は座っている為、どうしても見下される感があつて非常に
不愉快だった。

できる限り関心のないようたたき振る舞おつと、思い付く限り短い言
葉を使つ。

「…ああ。」

「ちゃんと書いて。あなたは三好京平？」

「三好京平。」

「IJの学校にあんたと同姓同名の人間は？」

「自分の知る限りいない。」

「私の知る限りもないわ。」

「へえ……。」

え これで会話終了なのだらうか？

質問の意図はおひか、彼女の名前すら知らない。

困ったよ。しまったさんのホットケーキだよ。まったく。

もう自分が何考えてるのかすらわからない。意味がわからない。

「じゃあ、今日からよひじへ。」好京平。

何秒間かの沈黙の後、スッと左手を差し出して握手を求められる。席を立つて制服のズボンで軽く手拭くといつも営業スマイルでああ、どうもどうも。

なんて言しながらペロペロ頭を下げようとハッとする。

「な…なにがよろしくだつ。馴れ馴れしい。
自分に何の用か言え。話はそれからだ。」

行き場を失つた左手をふらふらと迷わせた後、腕組みをした。

「ふん、優しくないわね。好感度DOWN。」

「は、はあー？」

「好感度よ好感度。あんたがやるげにむりでやつたことある？」

「ぬあ……つー」

「ぬあつて何よ。ぬあつて。」

あまりにも彼女と彼女の言葉にギャップがありすぎて京平はまづ動搖しちゃった。

ぎこちない発音で口にされた『ギャルゲー』には、芸人ならば離壇から転げ落ちる程にジックリ満載。

「自分はギャルゲーは……たしなむていぢりしかやらないが……。」

「やるんだ。あんたそんなげえむやるんだ。ときめきメモリアルやるんだ。好感度DOWN。」

「何ゆえときメモー!?

つか、何の好感度だ。何で自分の好感度言つちゃつてんだ。
つか、その好感度って貯めると何が起くるんだ。お前ルートか。お前ルートといつ惑わしい BAD END か。」

少し前に決めた、なるべく短い返事でクールぶるという作戦はいつのまにかなくなっている。

京平はつゝといつこくらいで、べどくもジックリ一覧表状態。

全て疑問を言わなくては気がすまないといひは、
オーマイキーならナンデくんポジション。

「まあ、そーゆー訳だから。」

「いや、どーゆー訳かさっぱりわからないんだが。」

少し強い口調で追い込む京平は、だいぶ気持ちに余裕がでてきたのであらう。

何でもないような表情に、眼鏡の奥では少し目を細め、いつもより鋭い目つきで彼女の方を見た。

もちろん高須竜児のような、ヤンキーを思わせる程の迫力も、逢坂大河のような虎を思わせるオーラもない。

有吉があだ名をつけるとしても『THE 神経質。』といったあたりなものがでてきそうだ。

まさにインドア派の典型で恐いといった印象は全く無い。

四文字熟語で表すとしたら、と尋ねられれば、

『亭主関白……ってあれ、これ四文字熟語だつたつけ?』

みたいな事になるんじやないかなあ・・なんて考えたりもしまして。

瞬間、彼女の肩が揺れた。大きく深い息を吸つたのだ。

両目は京平を確實に捉えている。

小さな口が大きく開かれ

「あんたがあたしの夫に相応しいかどうか……見定めてあげる。」「え？」

さて、ここもつづこんだ方がいいのだろうか。

「ええええええええええええええええええ！」

京平が言葉にするよりも早く、
クラス全員が驚きの声をあげた。

それも当然。さつきまでクラス中の視線が一人に集まっていたのだ。

一応ちら見程度で様子を窺つていた外野は、途端に大盛り上がり。
どれくらいって…そりゃあもつ、ワンピースに出てきそうなくらいのハイテンションで目なんか見開いちゃって。

なんだかとつてもジャンプノリ。

「夫だつて……。」

「結婚か！？結婚なのか！？」

「最初つからクライマックス！？」

「むしろ出木チジヤねーの？」

火をつけたように話はどんどん大きくなり、話の発端である京平と彼女はいつの間にか置き去りにされていた。

ノリのいい連中はヒュー・ヒューなんて昭和の匂いを漂わせつつ、分かりやすく煽^{あお}つてくれる。

「まあ、そーゆー訳だから。」

「どーゆー訳かさっぱりわからんのだが。……ってあれ、デジャウ

『？』

これだけ周りが騒いでいても気にならないのか、彼女は平然としていた。

むしろ

『返事は？』

と催促しているようにすら見える。

もちろん YES OR YES といった、悩む時間を『』えない
と一つでも親切な選択肢のみが『』えられている訳だが。

そして肝心な事を忘れていると気がつく。

その忘れた事さえ忘れそうな程に強いインパクトから、
彼女が馬になつたとするなりティープインパクトだな。ははは
なんて京平は考える。

つまらない。そうか、つまらないか。よし、じゃあこんな小説読む
のやめちまおーゼ。はは
なんて作者は考える。

京平が思い出した、というのは彼女の事だった。

もつと言つなら、彼女とは何なのか、という事。沢山の方向からみ
た彼女が知りたいのだ。

もちろんそれは哲学的にアイデンティティー（同一性）とは
何かを考えるような事ではない。

もつと単純で簡単で明快で純一で。

彼女彼女と先程から三人称女性代名詞でしか表現できないのは結
局、彼女が誰なのか限定できないからだつた。

深い深い詩的表現の人間とは何なのかなんて重たい質問ではなく、

へい彼女、お名前は？

と、軽くナンパを試みる第一歩のような質問。

あまりにも初歩的すぎて今更?って感じもするが聞けりつ。聞くの
だ。

京平は小さく息を吐いた。

「お前……名前は？」

「今更？」

わお、予想通り！

なんて驚いてる場合ではない。

マヌケな質問をした事は百も一百も承知の上だ。

「あたしは『炉木夏姫』。気軽に夏姫様って呼んでくれていいわよ。
三好京平。」

「はは。面白いなー炉木は。」

「……？」

乾いた笑みを浮かべながら瞼が痙攣するまぶたけいれんのが京平自身もわかつた。

さて、気軽に様付けとはどのような状況で使えばいいのだろうか。

「」のふぞけた女をテーブルの上の透明の灰皿でもつてガツンと…机の上の教科書でもつてポカンと叩いてやろうかと考えてこる。

そんな京平を他所に夏姫の顔は真剣そのもの。

「冗談は笑って言つものだと誰か教えてやつてほしいものだ。

精巧に出来たお面か、はたまたルパンの変装か、そうでなければ納得できないくらいに夏姫の瞳は瞬き一つしない。

きれいな顔してるだろ……生きてるんだぜ。

なんておっさんホイホイな冗談が通じる事もないだろう。」」」は眞面目に。

「何で」」」に来た？」

「徒歩できたわよ?」

「ああ、いや、そうじゃない…」

挫折した。即挫折してしまった。

まずは簡単な質問からしたつもつだったのに一皿皿でもつ話が噛み合わない。

京平は氣まずそうにハニカミながらぼつぼつと口の端をかいだ。

「え、ええと……」

早くも次の言葉がみつからない。聞かなくてはいけない事は沢山ある筈なのに適切な言葉は大事な時に限つて出てこないものだ。語意の問題ではない。もっと根本的な所から間違っているのだ。

「えっと……あの……」

気まずい。妙に空気が重い。

空白の時間を埋めるように、京平は意味のない言葉をただ口から漏らすだけで、前には進めない。

今まで異様なまでに盛り上がっていたクラスメートは、変に氣をつかい、再び静かにこちらを見守つていた。

各々自分の帰り支度はきちんとしながら、顔だけは京平と夏姫に向ける野次馬ばかり。

白けた空氣と周りの好奇心を孕んだ視線はプレッシャーにしかならず、京平の口元をかいていた手にも思わず力が入る。

さて、この状況を開拓する策があるなら、誰かこつそり自分に教えてはくれないだろうか。

などと自分で考える事を放棄した人任せな京平に、誰かが手を差し伸べてくれる訳もない。

しかし、そんな状況下で藁を放り投げた人物は意外にも意外。

京平を溺^{おぼ}れさせた張本人である。

「今日のイベントはいいがでよ。」

夏姫ははつととした口調で言った。……また、意味のわからぬ事を。

ボリュームとしては小さいが少しだけ高くてよく通る綺麗な声が京平の鼓膜を震わせる。

顔は精巧に作られたお面…以下同文。

「え……？」

意味不明な言動にマヌケな声を上げて固まる京平の前から、夏姫はぐるりと体を半回転させて、そのまま一直線に教室の前の扉へ。

「ちよ、ちよっと」

スタスターと、入って来た時同様に何の躊躇^{ためひら}いもなく歩いて出でていこうとする。

京平は思わず手を伸ばしかけるが、今は何と言つていいのかもわからない。

「また明日ね。三好京平。」

ガラガラと大きな音をたてて、教室のドアは勢い良く閉まった。

意味がわからない。

全く意味がわからないのだ。

嵐のように去つていった彼女を思い浮かべながら、京平はじっと立つたままで動く事もできないでいる。

再び扉が開く時は、全員一斉に田をそそいでしまったが、そこから出てきたのは見馴れた中年のおっさんの顔。担任のなんとか先生である。

皆期待したのか、それとも安心したのかは解らないが、長く息をついた。

その時、京平の良く知らないクラスメートが『会長』といつ単語を口にしたが、京平の耳にまでは届かない。

しかし、確かに聞こえたのだ。

日常が崩れてゆく音が。
何かが変わる予感が。
直ぐそこまで迫っている。

積み木崩しなんて可愛らしい音じゃない。東京タワーを爆破させ

るへりこのでつかに爆音。

めつと騒ぎなどする事はない。

日本人の男が、どれだけ『妹』と言つ葉に甘く、優しい響きを感じているかはインターネットで妹と検索してみれば一目瞭然である。

20300000件という是非とも自分の貯金の数にしたくなるような、0いっぱい夢いっぱいな数字にこには一つ、三好京平が物申す。

妹なんて生き物が穏やかで素直なのは想像とのつく次元でだけ。

裸ワイヤーシャツなんて死んでもしないだろうし、したとしてもリアル妹など可愛くない。可愛いわけがない。

人畜有害。生ける有害図書。

Ζ指定してやりたくなる程暴力的なシーン有り。なのだ。

それから、99%わがまま。

そして99・9%の確率で五月蠅い。^{ひぐわい}若しくは面倒くさい。

一人っ子や、男兄弟で育つた人間にこの苦しみはわかるまい。え
えい、わかるまいとも。

きつと犬の方がよっぽど従順で、まじめを頑張っていつとめてく
れるだらうし、
インコの方が馴れてつき従うだらう。

手のかからなさで勝負するなら亀が優勝候補。シード権獲得。

そんな風に妹に対しても否定的に考える三好京平の家族構成といえ
ば父、母、自分、妹という、ありきたりなもので、ペットは何も
飼っていない。

しかし、聞いてくれ。若しくは聞いて下さい。

非常に矛盾してる話のようにも聞こえるが、ここは言い訳させて
ほしい。……させて下さい。

「」の境遇には二つのワケがある。

まず一つ目は、気付けば妹は存在した事。

四歳差というちょっとだけ近い年齢差の為に、物心ついた頃には
家族の中にいたのだ。

妹を産むかどうかの選択権など当然自分にはなかつた。設定であり、

オプションであり、血の意思で手に入れたものではない。

そして二つ目、その自分の妹と呟つのが　　「おつかえりいー！」
おにいー」

「ただい……ぐはつ」

残りの1%だった。彼女は少数派に属する0・1%側の妹なのだ。

彼女は京平が帰つてくるのを玄関で待つていたのか、扉を開けた瞬間薄っぺらい胸板へ大きくダイブしてきた。

飛び込んだ拍子に彼女の頭が京平の肺の空気を無理矢理抜き、勢いのまま押され背中を強打し咳き込む。

京平の迷惑も御構い無しに彼女は小さな手を京平のお腹のあたりにまわしてぴつとつとくつついてきた。

「お帰りなさいおにー。さつやくのあと遊びぼー！」

「げほっ……わかつたからぢかつて。ほら。」

京平は後ろ手に鍵をかると革靴を脱ぎ、少し前に帰つてきた筈の妹の靴と一緒に玄関の端に並べた。

くつついて歩く妹に、二人三脚でもしてゐよつな歩きにくさを感じて、二人三脚がこれだけ大変ならば、20人21脚はもうありえない

いくらい大変なんぢやないか……

と下らない事を考えながら妹を引きずりリビングへ向かう。

「おにいってばあ～～！遊ぼ遊ぼ！何して遊びたい？」

「だあーつー何なんだよ。今帰ったばつかだから後で。」

「こつならいーの？後でつてあとどれくらい？何時何分地球が何回まわったころ？」

天井も高く、広々とした部屋の造りになつてゐるからか、彼女の高い声は一階中に響いた。

小柄な彼女には釣り合わない程の元気いっぱい、今まで学校に行つていたのは同じの筈なのに、京平とテンションに差がありすぎる。

「……地球が何回まわったかなんてわかる訳ないだろ。ちょっと静かにしどけ。」

「わかるもーん！地球は1日に1回しかまわらないんだから、それと地球が誕生してからの日付をかければだいたい……」

「なんだ、そんな地球規模の曖昧さでいーのか？じゃあ今月中には乃愛と遊ぶ。」

「やだあーー今日中がいい！今日遊ぶーおにいはまだまつてのあと遊べばいーのッ」

彼女　妹の名前は二好乃愛。
みよしのあ

外見は京平と全く似ておらず、小顔の為ショートカットがよく似合つていて、小さいのは顔だけでなく、顔や胸も……「げふんげふん」一見甘えん坊で無邪氣な印象も受けるが。

「乃愛も自分勝手だな。女は結構そりゅう人多いのかな？」

「そんなことないよー……って。もーもって何？」

「きなりすん、と声が低くなつた。

今さつきまでにここここて感じで長い襟足えりあしをふわふわと揺れさせ、元気にはしゃいでいたのがイキナリ動きを止める。

「え? 何、も、って?」

「乃愛も自分勝手の『も』だよ。何、『も』って? 誰もなの?」

「え? …… も、さあ。」

「女? もしかして今田女の人と喋つたの? お兄ちゃん?」

別の人と話してるんじゃないかと錯覚してしまつ程冷静な態度。二重人格としか言い様がない話し方、声、表情。

経験上、『お兄ちゃん』なんてノーマルな呼び方をするのはものすくなく怒ってる時だ。

京平は肩を震わせ、背中からどつと汗が吹き出す。

その汗までもが冷たく氷のようで、恐怖心はどんどん膨んでいった。

「ど、どーだつたかなあ。」

「何回喋つたかわからないくらいよく話すの?」

「違う違う。今日初めて話しただけで……」

そう口を滑らせてからハツとする。

「む……やっぱり話したんだ。どんな人?名前は?可愛い?…どひゅう
雰囲気?身長は?年齢は?学校の人?」

かわいいなんて言つたら間違いなく殺される…………

「変な人。冬なんとかつて名前で。ど、どぶす。身長は3㍍くらい
ある巨人。優しい雰囲気で……じゃなかつた。冷たい人。年は60す
ぎだな、うん。それから通りすがりの人だつた。」

「嘘だッ……！」

「え、な、なんでレナ……！？」

「なんでそんな巨人がお兄ちゃんに話しかけるのよ?」

「え……た、確かに。」

「だいたい何話したワケ?」

あんたがあたしの夫に相応しいかどうか…見定めてあげる。

「大した事は何も話していないでう。あ、噛んだ。」

まさかプロポーズされた、だなんて死んでも言えない。
むしろ言えば死ぬ事になりかねない。

話しただけでこんな尋問まがいの行動に出るのだ。
少しでもラブコメ的要素の含む内容は命に関わる大問題。

「本当にかわいくない人なんでしょうなッ！？スタイルとかはッ！
！？？」

「あ、ああ。不憫な程不細工な女だ。そして海外のテレビ番組で紹
介される過食症の人並みの太り具合。」

「めんなさい夏姫様！」と心中で土下座やら土下寝やらする。
取り敢えず妹から隠す為に彼女の逆を言ってみたが、少しリアリ
ティーに欠いているかもしね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7998k/>

彼女と別れる上手な方法。

2010年10月10日18時58分発行